

# $g(x \pm y) = g(x)f(y) \pm f(x)g(y), f(x \pm y) = f(x)f(y) \pm g(x)g(y)$ を満たす実数全体で微分可能な関数

いとう のぶお  
伊藤 巨央

## §1. 大学入学共通テストの出題から

2021年大学入学共通テストの数学ⅡBで、関数

$$f(x) = \frac{2^x + 2^{-x}}{2}, g(x) = \frac{2^x - 2^{-x}}{2} \text{ について, 以下の}$$

正弦・余弦の加法定理に類似した等式(A)~(D)が成り立つか否かを確認するという問題が出題された。

$$f(\alpha - \beta) = f(\alpha)g(\beta) + g(\alpha)f(\beta) \quad \cdots\cdots\text{(A)}$$

$$f(\alpha + \beta) = f(\alpha)f(\beta) + g(\alpha)g(\beta) \quad \cdots\cdots\text{(B)}$$

$$g(\alpha - \beta) = f(\alpha)f(\beta) + g(\alpha)g(\beta) \quad \cdots\cdots\text{(C)}$$

$$g(\alpha + \beta) = f(\alpha)g(\beta) - g(\alpha)f(\beta) \quad \cdots\cdots\text{(D)}$$

実際には、この  $f(x), g(x)$  は以下の等式①~④を満たすことが確かめられる。

$$g(x+y) = g(x)f(y) + f(x)g(y) \quad \cdots\cdots\text{①}$$

$$g(x-y) = g(x)f(y) - f(x)g(y) \quad \cdots\cdots\text{②}$$

$$f(x+y) = f(x)f(y) + g(x)g(y) \quad \cdots\cdots\text{③}$$

$$f(x-y) = f(x)f(y) - g(x)g(y) \quad \cdots\cdots\text{④}$$

共通テストの問題の正解は(B)で、③に相当する。

①~④は一見、正弦・余弦の加法定理として、 $f(x) = \cos x, g(x) = \sin x$  を連想するが、③、④における右辺の符号が異なっている。

では、等式①~④を満たす関数  $f(x), g(x)$  は一般にはどのような関数になるのか。本稿では等式①~④を満たす関数  $f(x), g(x)$  を

$$f(x) = \frac{2^x + 2^{-x}}{2}, g(x) = \frac{2^x - 2^{-x}}{2} \text{ の場合と同様に,}$$

実数全体で微分可能な関数として考察する。

なお、正弦・余弦の加法定理が適用される③、④の右辺の符号を変えた形についての考察は、数研通信79号で論じているので参照されたい。

## §2. ①~④の必要条件

まず、①~④の必要条件を考える。

明らかに  $f(x) = g(x) = 0$  の場合がある。

以下、 $f(x) = g(x) = 0$  ではないとする。

$$x = y \text{ とすると, ②より } g(0) = 0 \quad \cdots\cdots\text{⑤}$$

$$\text{④より } f(0) = \{f(x)\}^2 - \{g(x)\}^2 \quad \cdots\cdots\text{⑥}$$

$$x = 0 \text{ とすると, ①, ⑤より, } g(y) = f(0)g(y)$$

$$\text{③, ⑤より, } f(y) = f(0)f(y)$$

“常に  $f(y) = g(y) = 0$ ” ではないから、

$$f(0) = 1 \quad \cdots\cdots\text{⑦}$$

$$\text{⑥, ⑦より, } \{f(x)\}^2 - \{g(x)\}^2 = 1 \quad \cdots\cdots\text{⑧}$$

また、 $x = 0$  として②、⑤、⑦より、

$$g(-y) = -g(y)$$

$$\text{④, ⑤, ⑦より, } f(-y) = f(y)$$

よって、関数  $f(x)$  は偶関数、関数  $g(x)$  は奇関数であることがわかる。

$$\text{⑧より, } \{f(x) + g(x)\}\{f(x) - g(x)\} = 1$$

これより、 $f(x) + g(x)$  と  $f(x) - g(x)$  は常に互いに逆数の関係になっているから、決して0にはならない関数  $\phi(x)$  が存在して、 $f(x) + g(x) = \phi(x)$ 、

$$f(x) - g(x) = \frac{1}{\phi(x)} \text{ と表せる。}$$

これより

$$f(x) = \frac{\phi(x) + \frac{1}{\phi(x)}}{2}, g(x) = \frac{\phi(x) - \frac{1}{\phi(x)}}{2}$$

ここで、 $f(x), g(x)$  は実数全体で微分可能としているから、関数  $\phi(x)$  も実数全体で微分可能、従って“連続”であるが、常に  $\phi(x) \neq 0$  で、⑤、⑦より  $\phi(0) = 1 (> 0)$  であるから、常に  $\phi(x) > 0$  ということになる。また、 $f(x)$  が偶関数、 $g(x)$  が奇関数であることから、

$$\phi(-x) = f(-x) + g(-x) = f(x) - g(x) = \frac{1}{\phi(x)}$$

より  $\phi(-x) = \frac{1}{\phi(x)}$  である。

以上をまとめると、 $f(x)=g(x)=0$  の場合を除いた、実数全体で微分可能な関数としての  $f(x)$ ,  $g(x)$  における①～④の必要条件は

$$(*) \begin{cases} f(x) = \frac{\phi(x) + \frac{1}{\phi(x)}}{2}, g(x) = \frac{\phi(x) - \frac{1}{\phi(x)}}{2} \dots\dots ⑨ \\ \phi(x) \text{ は実数全体で微分可能な正値関数で,} \\ \phi(-x) = \frac{1}{\phi(x)} \dots\dots ⑩ \end{cases}$$

である。

### §3. 十分性の考察

逆に、§2の最後の(\*)の関数  $\phi(x)$  が具体的にどのような関数であれば、関数  $f(x)$ ,  $g(x)$  は①～④を満たすのか。実数全体で微分可能な正値関数としての  $\phi(x)$  の十分性を調べる。

⑨について

$$\text{①の左辺} = \frac{\phi(x+y) - \frac{1}{\phi(x+y)}}{2}$$

①の右辺

$$\begin{aligned} &= \frac{\phi(x) - \frac{1}{\phi(x)}}{2} \cdot \frac{\phi(y) + \frac{1}{\phi(y)}}{2} + \frac{\phi(x) + \frac{1}{\phi(x)}}{2} \cdot \frac{\phi(y) - \frac{1}{\phi(y)}}{2} \\ &= \frac{\phi(x)\phi(y) - \frac{1}{\phi(x)\phi(y)}}{2} \end{aligned}$$

よって

$$\phi(x+y) - \frac{1}{\phi(x+y)} = \phi(x)\phi(y) - \frac{1}{\phi(x)\phi(y)} \dots\dots ⑪$$

$$\text{②の左辺} = \frac{\phi(x-y) - \frac{1}{\phi(x-y)}}{2}$$

②の右辺

$$\begin{aligned} &= \frac{\phi(x) - \frac{1}{\phi(x)}}{2} \cdot \frac{\phi(y) + \frac{1}{\phi(y)}}{2} - \frac{\phi(x) + \frac{1}{\phi(x)}}{2} \cdot \frac{\phi(y) - \frac{1}{\phi(y)}}{2} \\ &= \frac{\phi(x)\phi(y) - \frac{\phi(y)}{\phi(x)}}{2} \end{aligned}$$

よって

$$\phi(x-y) - \frac{1}{\phi(x-y)} = \frac{\phi(x)\phi(y) - \frac{\phi(y)}{\phi(x)}}{2} \dots\dots ⑫$$

$$\text{③の左辺} = \frac{\phi(x+y) + \frac{1}{\phi(x+y)}}{2}$$

③の右辺

$$\begin{aligned} &= \frac{\phi(x) + \frac{1}{\phi(x)}}{2} \cdot \frac{\phi(y) + \frac{1}{\phi(y)}}{2} + \frac{\phi(x) - \frac{1}{\phi(x)}}{2} \cdot \frac{\phi(y) - \frac{1}{\phi(y)}}{2} \\ &= \frac{\phi(x)\phi(y) + \frac{1}{\phi(x)\phi(y)}}{2} \end{aligned}$$

よって

$$\phi(x+y) + \frac{1}{\phi(x+y)} = \phi(x)\phi(y) + \frac{1}{\phi(x)\phi(y)} \dots\dots ⑬$$

$$\text{④の左辺} = \frac{\phi(x-y) + \frac{1}{\phi(x-y)}}{2}$$

④の右辺

$$\begin{aligned} &= \frac{\phi(x) + \frac{1}{\phi(x)}}{2} \cdot \frac{\phi(y) + \frac{1}{\phi(y)}}{2} - \frac{\phi(x) - \frac{1}{\phi(x)}}{2} \cdot \frac{\phi(y) - \frac{1}{\phi(y)}}{2} \\ &= \frac{\phi(x)\phi(y) + \frac{\phi(y)}{\phi(x)}}{2} \end{aligned}$$

よって

$$\phi(x-y) + \frac{1}{\phi(x-y)} = \frac{\phi(x)\phi(y) + \frac{\phi(y)}{\phi(x)}}{2} \dots\dots ⑭$$

⑪, ⑬より

$$\phi(x+y) = \phi(x)\phi(y) \dots\dots ⑮$$

⑩, ⑫, ⑭より

$$\phi(x-y) = \phi(x)\phi(-y) \dots\dots ⑯$$

明らかに⑮と⑯は同値であるから、⑮のみに着目し、この後は関数  $\phi(x)$  を、⑮を満たす実数全体で微分可能な正値関数として具体的に調べる。

$k$  を任意の実数として  $\phi'(0) = k$  とする。導関数  $\phi'(x)$  は

$$\begin{aligned} \phi'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{\phi(x+h) - \phi(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{\phi(x)\phi(h) - \phi(x)}{h} \quad (\because \text{⑮}) \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \phi(x) \frac{\phi(h) - \phi(0)}{h-0} \quad (\because \phi(0) = 1) \\ &= \phi'(0)\phi(x) = k\phi(x) \end{aligned}$$

常に  $\phi(x) \neq 0$  であるから

$$\frac{1}{\phi(x)} \cdot \frac{d}{dx} \phi(x) = k$$

この両辺を  $x$  で積分すると

$$\int \frac{1}{\phi(x)} \cdot \frac{d\phi(x)}{dx} dx = \int k dx$$

$$\int \frac{1}{\phi(x)} d\phi(x) = \int k dx$$

常に  $\phi(x) > 0$  であるから

$$\log\{\phi(x)\} = kx + l \quad (l \text{ は任意定数})$$

$$\phi(x) = e^{kx+l} = e^l e^{kx}$$

ところが、 $\phi(0) = 1$  より、 $e^l = 1$  つまり  $l = 0$

$$\text{よって } \phi(x) = e^{kx}$$

ここで、 $e^k = a$  とおくと、 $\phi(x) = a^x$  と表せる。

定数  $a$  は任意の正数であるが、 $a = 1$  の場合を除けば指数関数になり、 $a = 1$  の場合は、 $\phi(x) = 1$  で、 $f(x) = 1$ ,  $g(x) = 0$  である。

結局、⑮を満たす実数全体で微分可能な正值関数としての  $\phi(x)$  は、

$$\phi(x) = a^x \quad (a \text{ は任意正数})$$

である。

以上より、(\*)における関数

$$f(x) = \frac{\phi(x) + \frac{1}{\phi(x)}}{2}, \quad g(x) = \frac{\phi(x) - \frac{1}{\phi(x)}}{2}$$

が①～④を満たすのは、 $\phi(x) = a^x$  ( $a$  は任意正数) のときである。

## §4. 結論

本稿をまとめる。

4つの等式

$$g(x+y) = g(x)f(y) + f(x)g(y) \quad \dots\dots①$$

$$g(x-y) = g(x)f(y) - f(x)g(y) \quad \dots\dots②$$

$$f(x+y) = f(x)f(y) + g(x)g(y) \quad \dots\dots③$$

$$f(x-y) = f(x)f(y) - g(x)g(y) \quad \dots\dots④$$

を満たす、実数全体で微分可能な関数  $f(x)$ ,  $g(x)$  は、以下のようになる。

- ◎  $f(x) = g(x) = 0$
- ◎  $f(x) = 1, g(x) = 0$
- ◎  $f(x) = \frac{a^x + a^{-x}}{2}, g(x) = \frac{a^x - a^{-x}}{2} \quad (a > 0, a \neq 1)$

なお、2021年大学入学共通テスト数学ⅡBでは、上の  $a = 2$  の場合が適用されたということである。

### 《参考文献》

- [1] 2021年 大学入学共通テスト 数学ⅡB  
(愛知県 名古屋国際中学校・高等学校)